# やむやむりあむの日常

炸裂プリン

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

?遂にデレステの夢見(ゆめみ)りあむにも声帯が実装されたんだって!?

?違う。違うんだよＰサマ。りあむに声帯が出来たんじゃなくて、ＰサマたちにＰ鼓膜が実装されたんだよ!

?な、なんだってー!?

?ハッハッハー!?恐れ戦き尊べぼくのお声を!?特別にぼくを推しアイドルにしてすこり続ける権利をあげるよ!!

?あっ、それはいらないです。

?えっ。

?それはそれとして、この茶番はなんだよ。

?アイドルのプロデュースを「それ」呼ばわりするＰの屑がコノヤロウ。・・・・・本編とは関係ない。必須記入事項の「あらすじ」を埋めるための茶番だよＰサマ。

?そう・・・・・・(無感心)

?自分で話振っといてそういう反応するのダメだと思う!!?めっちゃ、やむ!!!

# 目　次

やむやむりあむ　1
うやむやりあむ　8
ゆうあいりあむ　16
れんあいりあむ　30

# やむやむりあむ

【ねー、レッスンきつすぎて】
【めっちゃやむ】
【へー】
【へーじゃないが】
【はい】
【はいじゃないが！】
【必死すぎて草】
【なにわろてんねん★すぞ！】
【は？】
【こっちはお前を】
【追い出す準備は出来てるんだが???】
【ゆるして】
【ドヤ顔幸子のスタンプ】
【は？】
【あちゃまてまちざえた】
【草】
【落ち着け】
【怒ってないから】
【ほんと？】
【ほんとほんと】
【本気のマジでリアル】
【やった！】
【よかったあ！】
【笑顔のりあむの自撮り写真】
【オエー鳥のAA】
【なんでだよ!?!?!?】
【文字なのにうるさいの草】
【あーもうぼくやんだー】
【ちょうやんだからな】

【思いっきり甘やかさないと】
【機嫌治らないからな】
【とりあえず美味しい晩御飯と】
【晩御飯あーんと】
【ねえメッセージ見てる？】
【疲れた体のマッサージと】
【膝に乗ってゲームさせてもらうからな！】
【もちろん協力プレイのやつ！】
【インフェルノ制覇する!!】
【ピースしてるドヤ顔りあむの自撮り写真】
【ねえ】
【あれ既読にならない】
【ねえツッコミは???】
【ねえ】
【ねえねえ】
【ねえええええええ】
【無視くぼですか？スタンプ】
【同上】
【同上】
【同上】
【同上】
【同上】
【同上】
【同上】
【やむ】
★？★？★
「おにーちゃんがそっけない！」
？夏の薫風も過ぎ去って、秋の香りを乗せた爽やかな風が吹き始める頃、夢見（ゆめみ）りあむはその特徴的すぎるピンクな頭髪を揺らしながら、自身の所属する事務所にて突然、大袈裟な叫びを上げた。
？手にしたスマホが軋（ひめい）みをあげるほど握り締め、わざとらしく深い―

―それはもうナイアガラの滝も各やと言うほどに急転直下で吐かれたそのため息は、明らかに「何があったか聞いて」オーラに溢れていた。

?事実、ひとしきり叫んだ後に顔を押し付けた、三角座りで立てた膝から、周囲を伺うようにチラチラと顔を上げては膝に押し付けてを繰り返していた。

?その姿、端的に且つ直球に評するのならば――

「うっざ」

?この一言である。

「えっ、酷くない??ぼく今すっごい萎えてるんだけど。やんでるんだけど???仲間がしょんぼりしてるんだよ????頭ぽんぽんするとか、バイノーラルな癒し音出してさり気なく癒すとか、兎にも角にも話を聞くとか理由を聞き出すとか話し相手になるとかあるくない?????もちょっと母性出していこ?????こういう時のママみってマジで大事だと思うよ!?アイドルにもバブみが求められる時代がキてるんだよう!!!」

「早口オタクきっつ」

「んあ゛あ゛あ゛あ゛!!?なんだよう!?なんで今日はそんなに邪険に扱うんだよう!」

?もう本当にやむっ!!?世界中に響け我が慟哭とばかりに絶叫するりあむを、両耳を塞ぎながら鬱陶しげに半目で見詰める少女の名は砂塚(すなづか)あきら。

?不憫にもこの夢見りあむ(喧しい女)と同期でアイドルになってしまった女の子である。気怠げな目付きと、マスクの奥に隠したギザ歯が可愛いくてエロいんすよこの娘。

「今日はっていうか、毎日のように聞かされてたら、いい加減面倒になるよね」

「良いじゃんかあ!?同じ『おにーちゃん』を持つもの同士、仲良くしようよう!」

「あ、うちの兄は本物の兄なんで、そっちの兄妹プレイに巻き込まないで欲しいな」

「プレイじゃないし!?従兄妹だからそんなやましい関係と違うし!!」

「ふーん。知ってた」
「だよね!?ですよね!?自己紹介でその話してからもう随分経つもんね!」
「そうだね。気が付いたらりあむに対して敬語使うのが馬鹿らしく思えるくらいには、付き合いが長くなっちゃったね」
「うん・・・・・同じ時間を過ごして仲良くなったハズなのに、あきらちゃんの言葉にトゲが増え続けてるの解せぬ上にやむんだけど」
「ははは、気のせい気のせい」
「嘘だ。わざとだ」
「プロデューサーが実は所属アイドルに手を出してる説くらい気のせい」
「あー、なんかこの前、和久井留美さんと三船美優さんに挟まれて変な空気出てたけど、そーいう事なのかなー」
「アレね、何事かと思ったよね」
「ねー。最終的にちひろさんが仲裁して、何故かPサマがスタミナドリンクのダースセット抱えて泣きながら営業に出てったけど」
「あの終わり方ホントに謎過ぎて笑ったよね」
「もう即デレポに載せたよね」
「んで炎上したよね、りあむのデレポアカウント」
「一緒に載せたあきらちゃんのもね・・・・・思い出したらやんできた。はあ、一時のテンションで何してんだろ、ぼく」
「いつもの事じゃん?」
「うえー、そうだけどぉ」
?ゴソゴソ。勝手知ったると言った風に、しょんぼりするりあむの事など放置して、あきらはスマホを取り出すと、メディア側の音量をゼロにしてから、ホーム画面に作られたアプリのショートカットアイコンをタップ。
?友人(仮)のしょうもない嘆きの声を遮断するべく、己の世界に没入し始めた。
「ねえ、おもむろにアプリゲーの周回始めるのやめて??お話してる途中でそれされるの、めっっっっちゃやむんだけど」

「ははっ、そうだね。その話おもしろいね」
「あれ、これもうぼくの話聞いてなくない？」
「それ凄いね。Ｔｗｉｔ○ｅｒに載せたら絶対にバズるよ」
「せめて最低限、会話の体裁はとろう？」
「うーん、笑点に出たら座布団億越えで貰えちゃうよ、今の話」
「ねえあきらちゃん、その相槌どういう場面で使うの？」
「ははっ、そういう時はウサミンさんの真似すれば何とかなるよ。せーの、」
「え、あ、うぇえ!??なに、これぼくがやる流れ？」
「ミミミンミミミン」
「えっえっ」
「ミミミンミミミン」
「えっ、あの、あきらちゃん？」
「ミミミンミミミン」
「あっえ、うぅ・・・・・・り、りーあみん☆彡」
？きゃはっ★★
「ミミ・・・・・・あ。ミスった。ちっ、周回は最短で回るのが要だってのに」
「えぇ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・やむっっ!!!!!」
☆？☆？☆

「ただいりあむー」
？都内のとあるマンションの一室へ、最近になって漸く渡してもらえた合鍵（！）を使って愛しの愛しの愛おしの我が家（わがや!!）へ足を踏み入れる。
？脱いだ靴がぴったりおにーちゃんの物と並ぶようにして、バックに詰めた汗まみれのレッスン着を、既に洗濯機に入っていたおにーちゃんのシャツとトレードしつつ深呼吸。
？鼻腔を通過し、肺を満たす天上の香りに身体を熱くしながら、少しクラクラする（きっと酩酊状態ってこういうことを言うのだ！）頭で今日も一日がんばったなー、なんてどうでもいい事を考える。

?そうして、脱衣所に残っていた尊い香りをめいっぱい吸い込んでいると、
「りあむー、帰ったのかー?」
?おにーちゃんの声が聴こえた。うへへ。
?嗚呼、この耳を優しく撫でるテノールが心地いい。
?響く鼓膜のひと揺れすら愛おしく感じてしまうのは、きっとこれがぼくにとっての清涼剤だからだ。そうだ。そうに違いないのだ。
?だからぼくが日頃の疲れを癒すために、おにーちゃんがいない時間におにーちゃんの部屋でダラけるのも仕方ないのだ。
「おーい、りあむ?」
「んふぇ、あ、あーい!?今行く!?ただいまー!!」
?いけないいけない。ちょっとだけトリップしてた。
?カバンに入れた宝物が気付かれないように、ぼくは急いでリビングを抜けて自室へ――
「おかえり。それと、りあむ」
「・・・・・・あい」
「俺のシャツは洗濯機に入れておけ。な?」
「・・・・・・・・・・・・あい」
?わーお。・・・・・・おにーちゃんは、ぼくの考えていることなんてお見通しなのだ。
?それってつまり心が通じ合っているということで、それってそれってつまりは擁するにまあ、えへへ、うーん。ふひへへ、
「そういう事だよね!?おにーちゃん!!」
「どういう事だよ。早くシャツ戻して着替えるなり風呂入るなりしてこい」
「うわー!?ぼくのこと気にしてくれるおにーちゃんすこ!!」
「夜だぞ静かにしろ。あと、昼間はメッセ返せなくてごめんな。お詫びに晩御飯は一緒に餃子作ろう」
?えっ。
?・・・・・・・えっ。
?おにーちゃんが、ぼくと、りあむと、一緒に、ギョーザを、作る?

?おにーちゃんが、りあむのために、餡をお手手に乗せて、逆のおててに持ったギョーザの皮に包んで、焼いてくれる??おにーちゃんの生の手で包まれた餡を包んだギョーザを、食べられる???
?・・・・・・。
?・・・・・・。
?あっ、ぼくが黙ったせいで困ったように笑うの可愛いすこ。
?・・・・・・。
?あっ、今日もエプロン姿尊いです。ご馳走様です。まだ何も食べてないけど。おかずをいつもありがとうございます。
?・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
「なにそれエッッッッッッッ!!!」
「は!?」
?つまりそれって、S〇Xとまではいかなくとも、もはやペッテ〇ングじゃん!!?はあー!?今日まで生きててよかったあああああ!!!
「おにーちゃんだいすこ!?抱いて!」
「うるせえ!」
?抱きつこうと飛び込んだら、エグめのブラジリアンキックで迎撃されました。やむ。

# うやむやりあむ

【おにーちゃん】
【どうした】
【はやくかえってきて】
【もう少しだけ待ってて】
【２２時には帰れるから】
【もう少しっていつまで】
【あ、うん】
【わかったまってる】
【待つくぼのスタンプ】
【えらい】
【えへへ】
【でも早く寝た方がいいぞ】
【んーん】
【まってる】
【ピースする部屋着りあむの自撮り写真】
【困り顔の犬のスタンプ】
【ねえねえ】
【おにーちゃん】
【どうした】
【だいすき】
【俺も好きすぎてしぬ】
【え】
【あ】
【誤爆】
【え】
【ごばくなに】
【ね】
【好きすぎなのってなにのこと】
【ね】

【どうしたの】
【へんぎ】
【返事して】
【ね】
【ねえ】
【おにーちゃん】
【おにーちゃん】
【おにーちゃん】
【おにーちゃん】
【ごめぬ休憩い終わた】
【おにーちゃん】
【あっ】
【がわばって】
【ガッツポーズウサミンのスタンプ】
【がんばって】
【好きなのだれなの】
【帰ったら教えてね】
【誤爆だから】
【ぼくのことしゃないだね】
【やむ】
★?★?★
「や〝む〟！」
『うわ汚ったない濁音』
?果たして、これがアイドルが出していい声なのだろうか。
?獄卒に責められる罪人の悲鳴ですらもっと耳に優しいのではないか。そう思わせるほどに低く重い声が、夢見りあむの声帯より絞り出された。
?その目元にはうっすらと涙が滲んでおり、ともすれば直ぐにでも泣き出してしまいそうな表情で、同期で友達である砂塚あきらとテレビ電話で通信していた。
?時刻は夜の２０時。唐突に電話をするには、人によってまあまあ迷

惑な時間帯である。
「う〝ぅ、親友が泣きそうなんだぞ。なのに第一声がきたないって酷いじゃないかあ！」
『そんなこと言われても、通話開始直後にイキナリ濁点マシマシの「やむ発言」されたら困るしかないでしょ』
？こちとらドン勝寸前なんだぞ。そう告げる液晶越しのあきらの横顔は真剣そのもので、時折聞こえるクリック音とキーボードの操作音から、今行っているゲームにどれほど力を入れているかが伺い知れた。
？まあ、だからといって、
「ゲームと親友、どっちが大事なんだよう！」
『今はゲーム』
「即答とかめっちゃやむぅ！」
？このピンク頭が気を利かせて静かにするとか、通話を切るだとか、そういった行動を取ることは無かった。
？夢見りあむ。懐に潜り込んだ相手にはドロドロに甘える面倒な女である。
「ねー、あきらちゃあん」
『あっ、ちょ、猫なで声やめて』
「あ、ごめんね。ぼくの声が気になって手元が狂っちゃうよね」
『今からトイレに駆け込んで嘔吐するとドン勝できないから』
「なにそれ酷すぎて逆にやまないんだけど。素直に辛いんだけど」
『このファッションやみ女め』
「ファッションやみ女ってなに!?」
『うるさい。物音が聞こえないから黙って』
「あ、はい」
？ガチの時のあきらちゃんだ・・・・・・。
？眼差し強く、高性能のゲーミングヘッドホンを掛け直し、先程以上の真剣な面持ちでゲーム画面と相対するあきらを、りあむは固唾を呑んで観戦した。
（・・・・・・ポテチとか持ってくれば良かった）

？気分は完全に野球中継を観るおっさんである。
？先程までの「やみ」はどこへ行ったのか。そんなんだから「おっぱいがデカくてバラエティ向けなだけのファッションやみアイドル」とかネットで評されてしまうのだ。
・＊：＊・．▪☆＊・。
『・・・・・・ぐす』
「あー、えっと、あきらちゃん？」
『な〝に〟』
「げ、元気だしなよ。ほら、たかがゲームだしさ」
『たかがじゃない!?本気なの!?本気だっだの〝っ！』
「あひっ、ごめんなさい・・・・・・」
？時刻は少し進んで２０時５分。
？現在、りあむの当初の目的であった「おにーちゃんのメッセが浮気（そもそもりあむとは付き合ってない）なのかどうか会議」は、いつの間にやら霞の如く霧散し、勝利目前で弾む心を粉々に叩き潰されたあきらの慰め会に推移していた。
『うぐっ。なんで、な〝ん〟でフライパンなの〝・・・・・・。普通の武器で倒せばい〝い〟ぢゃん〟』
「あー、えっと・・・・・・」
『背負ってだぢゃん!?すないぱーらい、ライフル!?どうしてわざわざフライパンでっ、フライパンでごろしたの〝っ！』
「うわー、これぼくどうしたらいいんだよう」
？ぐずぐずと溢れる悔し涙と鼻水を、パジャマの上に着ていた薄手のカーディガンの袖で乱暴に拭うあきら。
？その目元は、真っ赤になっていた。
『そ、れも。それも三人でっ。三人でっ、寄ってたかっで!!』
「う、うんうん。アレは酷かったねー」
？りあむ視点。テレビ電話越しに見えていたのは、徐々に勝利への確信から来るドヤ顔から怒りへ。怒りから焦りへ。焦りから悲しみへと緩やかに推移していくあきらの表情だけだったのだか、もはやかける言葉が見つからず、完全にイエスマンかオウム返しするしか慰める

すべは無かった。
?というか、基本的にそういった行為に慣れていないため、りあむは返事を返すだけでも割と精一杯だった。
『うぅ・・・・・・ぐすっ』
「あー、えー、うん。ほ、ほらほら。袖で拭ったらあきらちゃんの可愛いお目々が真っ赤になっちゃうよ。大丈夫だいじょうぶ。次は楽しく遊べるから、ね?」
『うぅ、ほんと?』
「ほんとほんと!?りあむちゃんが保証するよう!?ほら、なんなら今から一緒に地球防衛しようよ。ぼくおフェンフェンでひたすら反射するの好きなんだー」
?相手が自分の攻撃で死ぬのが楽しくて。そんな言外のクズ思考は置いといて、何となく思ったことを口にするりあむ。
?脊髄で喋り、生きている人間はこういう時気楽で良い。
「それにほら、ゲームって少し間を置いて遊ぶと、なんか上手くいく時あるじゃん!?」
『・・・・・・ん、分かった。やる』
?痛々しく赤くなった目で、ゆるりと微笑むあきら。
?鋭利で頑丈そうなギザ歯が、嬉しそうに歪む口元からちらりと覗いた。
「おーし!?ぼくの実力見せてやるぞう!?おフェンフェンマスターのりあむとはぼくのことだ!」
『じゃあ、カタパルト走法なしね』
「えっ、なんで。ってかそれはちょっとキツい・・・・・・」
『なしね。その方がりあむのリアクションおもしろい』
「え、でもそれだと戦力にならな」
『なしね』
「あ、あい・・・・・・あれー、なんか立場逆転してない??めっちゃやむんだけどぉ」
?このあと滅茶苦茶ゲームして寝落ちした。
☆?☆?☆

?ゲームしながら落ちたと思ったのに起きたらベッドに寝てて枕元になんか推しアイドルの限定グッズ（ウサミンのサイン入りサイリウム！）置いてあってメッセージには「ごめん」から始まる文章で昨日の「好き」は昔からの付き合いがある友達とも並行で会話しててたまたま好きな動物の話になって猫の画像が乱舞してたせいだって凄い勢いで書かれててなんか焦ってる風なのが浮気を疑われて弁明に必死な彼氏みたい（漫画知識）で可愛くて尊いと思いました。りあむ。間違えた。まる。

「なのでぼくは今、抑えきれない情動に身を任せ、おにーちゃんのお部屋に来てマース（小声）」

?ちなみに、おにーちゃんはベッドで熟睡してまーす。おにーちゃんは布団の中で丸くなるタイプでーす。可愛いの化身かよ。

?くぅくぅ静かな寝息がヤババでーす。尊さの極地でーす。

?というか、今この瞬間にも部屋の中でりあむの吐いた息をおにーちゃんが吸って吐いてその吐いた息をりあむが吸って・・・・・・という尊みの無限ループが発生していることに気付いてしまい、なんかもう全身の至る所から汁を放出して仰げば尊死してしまいそう。

「・・・・・はあ、はあ。もうなんか、幸せすぎてやみそう。てかやむ。やんだ。ぼくは恋のやまいに病んでるの」

?そしてその病の元はあなたの吐息。そよぐあなたの吐息は北風よりも鋭くこの身を苛んで、けれど太陽よりも熱く激しい情熱をぼくの心に宿させるの。・・・・・・あれ、もしかしてぼくってポエムの才能ある??今のやつデレポに載せよ！

「うへへ。おにーちゃん可愛いよおにーちゃん」

?思わず取り出したスマホでお写真めったクソ撮っちゃうくらいには可愛いよ。うへへ。

?パシャパシャパシャ。あー、いいっすねぇ。パシャパシャ。あー、お客様困ります!?ぼくが発する熱で寝苦しくなったからと言って、そんなお布団はだけさせてお肌の露出増やすのはえちえち過ぎます!?ぼくのえっちコンロがエチチチチチチチ――

「んん、たら・・・・・・いま。り、む」

?勃(ボッ)ッ!!
「はあー!?もう無理据え膳。ぼくは悪くない。こんな誘いをかけるおにーちゃんが悪いんだよ!?あー、ぼくのおにーちゃんの寝言が尊すぎてやみやみパニックだよお！」
?では。いただき――
「ます！」
?もはや退路なし！（ある）?ぼくは意を決しておにーちゃんのベッドへとダイヴ・イン！
?ふわあ、おにーちゃんの匂いと体温と温もりと香りが混ざりあってハーモニー！
「んん、あ、え??り、りあむ??!何してんだおまっ、あっくそマウント取られて力が」
「うへへ、ぼくと一緒に〝寝よう〟ね。おにーちゃんっ」
「やめっ――あっ」
?このあと滅茶苦茶セッ――
「起きろりあむ!?砂塚さんとプロデューサーさんがもうすぐ迎えに来るぞ！」
「ふがっ!?」
「お前今日はバラエティの野外ロケだって言ってたろ。だから早く寝ろって言ったのに」
「うん??えー、あぇ？」
「ゲームもスマホの電話も付けっぱで寝やがって。寝起きで最初に見たのが俺みたいなので、砂塚さんが可哀想だろ」
「・・・・・・??あ、ぼくのおふぇんふぇんしんでる。すまほのジューデンきれてる。やむ」
?朝とお昼のお弁当できてるから、早く着替えて忘れず持っていけよ。そう告げる爽やかなモーニングおにーちゃんが尊すぎて、ぼくは無事に死亡した。
?・・・・・・限定アイテムとおにーちゃんとの寝起きックスは夢オチでした。メッセージの件は本当でした。だけどめっちゃシンプルな回答が載ってるだけで、浮気弁明彼氏感は無かったです。やむ。

？なんか納得いかなかったので二度寝したら、顔真っ赤にしたあきらちゃんに、かかと落としで叩き起されました。ちょーやむ。

ゆうあいりあむ

【半泣きで山登りするりあむの画像】
【草】
【わあああああ!!!!!】
【なにそのがぞけしてはくせすてて!!!?!】
【鼻水垂らして幸子に縋るりあむの画像】
【ほんと草】
【なんでえええええ】
【なんでそんな画像あるのおおおお】
【ヒャッハー輝子スタンプ】
【あ間違えた】
【しょんぼり美優スタンプ】
【冷静に変えてて草】
【割と余裕あるなお前】
【ないよおおおおお!!】
【よりによっておにーちゃんに
それ見られてるなんてほほんと
なんでもうマジで嫌だやだやだ
あああああ】
【語彙力ゼロの長文笑うわ】
【ぬわあああああ】
【パパスが出てきた】
【やむうううう】
【泣きながらカップ麺食べるりあむの画像】
【ドヤ顔で下山するりあむの画像】
【また行こうとPに言われ絶望するりあむの画像】
【イキイキしてる】
【ふわあああああ!!!?】
【もうやだあああああいあ!!】
【アイドル辛い?】

【つらい】
【いや】
【ちがう】
【つらくない】
【楽しい？】
【たのしい】
【帰るとおにーちゃんいるから】
【倍楽しい】
【なら良かった】
【これからも頑張れ】
【応援してるぞ】
【え嬉しい】
【おにーちゃんしゅき・・・】
【おにーちゃんが応援してくれるなら】
【ぼく無限にがんばれる！】
【超高空の機内で青褪めた顔のりあむ＆普通な幸子の画像】
【アイドルやめる】
【草】
★？★？★
「もう無理、やーむー」
「それ森久保サンの「むーりー」じゃん」
「違うよ。りあむオリジナルだよ」
「ツクダオリジナルみたいに言うな。それよりやめなよ、人のネタ取って人気取ろうとするのは」
「そういうのじゃないよう!?あと乃々ちゃんのを取るとか恐れ多すぎて出来ないよ!?っていうかぼくがやったら炎上して終わりだよ！」
「たしかに」
「普通に納得されるとかやむ・・・・・・・」
？ネタじゃないんですけど・・・・・・。そんな声がプロデューサーの事務机下から聞こえてきそうな、まだまだ日差しの強い初秋の昼下がり。

？今日も今日とてあきらと共に挑んだレッスンを終え、二人は事務所でスマホ片手に駄弁っていた。
「あと乃々ちゃんの「むり」は「むーりぃー」だからね。イントネーションは「り」に置くんだよ」
？夢見りあむ、迫真の真顔である。
？ずいっと顔を寄せてきたりあむに、あきらは並んで座っていたソファーの端へ身を寄せた。
「えっ、うん。なんかごめん」
「そこんとこホントに気を付けてね。アイドルにとってこういう細かいアイデンティティって大事なんだからね！」
「りあむにアイドルマウント取られるの凄いイラってくるね」
「え、ひどい。ひどくない？」
「#今日のやみ」
「友達が辛辣な対応してきてやむ・・・・・・」
？アイデンティティじゃなくてリアリティなんですけど。プロデューサーの事務机下からひ弱な抗議が続いていそうな中、りあむとあきらの談笑は続く。
「いや、そんなことよりもさ」
「そんなことて」
「見てよこの画像！」
「#お宝アイドル画像？・・・・・・いや、お宝??まあ、アイドルが鼻水垂らしてる画像はある意味お宝か。よく撮れてるじゃん」
「ぜんっぜん嬉しくないぃー!?もっときゃわたんな画像を保存して欲しいのに、こんなのばっかなのホントにやむ！」
「なんかこういうのばっかだよね。りあむの仕事」
「何でだろうね。初めてのバラエティに出て以来、こんなのばっかでやむんだけど・・・・・・。こうなったのは全部バラエティデビューで山登らされたせいだよ・・・・・・」
「しょうがないじゃん。この事務所の登竜門みたいなモノらしいんだから。新人アイドルと幸子サンの体当たりロケ」
？通称「輿水幸子チャレンジ」である。なお、命名者はプロデュー

サー。
？自身のスマホに保存された当時の写真をあきらと共に振り返りながら、りあむは会話を続けた。
「いや、幸子ちゃんと共演出来たのは素直に嬉しかったよ。限界オタク化してまともに会話できなかったけど」
「二つの意味で限界化したよね、あの企画で」
「いやまあ、初めての山登りでキリマンジャロとか頭おかしいと思ったよね。ぼく、良い顔で「仕事取ってきたぞ」言ってきたＰサマが新手のサイコパスに見えたよ」
「一切呼吸を乱さない幸子サンとゲロ吐きそうなりあむの対比が面白かったよ」
「いや吐いたよ。ドクターストップ掛かるの期待して吐いたけど、一発で無理やり吐いたのバレてそのまま登らされたんよ。あたま？おかしい」
「でもおかげでバズったじゃん。＃キリマンジャロ登頂？＃注目の新人バラエティアイドル？って」
「そうだけど、そうだけどさ!?にしたってコレはなくない!??バラエティの冠被ったアイドル活動は控えめに言って絶対にノゥだよう！」
「でも目立てるじゃん。一番に目立てるアイドルが？＃りあむの目標？でしょ？」
「そーうーだーけーどー!?ぼくはもっとキラキラしたいの!?色んな人の記憶に焼き付く凄いアイドルになりたいっ！」
「記憶に焼き付いてはいるよ。うん」
「目立ってはいるけど、キラキラしてないからやんでるんだよう・・・・・・」
？あーだこーだ、わーきゃーやむやむおにーちゃんしゅきしゅきと喧しく鳴くりあむに、自身のスマホを弄りながら「あーはいはい」と相槌を打って応対するあきら。一緒にデビューしてからこっち、ずっと続くこの事務所の日常風景である。
？さて、その後も益体も無い会話のキャッチボールとドッチボールを繰り返していると、不意に事務所の扉が壊れんばかりの勢いで開け放

たれた。
「ひえっ、なになに？」
「ふふーん!?可愛いボクが!?この日本が誇る「人間カワイイ国宝・輿水幸子」が、帰ってきましたよ!!?ふふふーんっ!!」
？噂をすればなんとやら。入ってきたのは日本一カワイイを自称するアイドル、輿水幸子だった。
？相も変わらず出処不明な自信を振りまいて、今日も今日とてキラキラと己のカワイさを振り撒いていた。
「わあ!?幸子ちゃんだあああ!!」
「おや、りあむさんとあきらさんじゃないですか。ボクを出迎えに来てくれたんですね。ご苦労様です」
「ひえぇ話しかけられたったよどうしよあきらちゃん上手く返事できないよハンパないよ生の幸子ちゃんいつも通りちっこくてカワイイよシンドいよー・・・・・・！」
「ここで限界化しないでよ。・・・・・・ああ、えっと、お疲れ様デス、幸子サン。長旅・・・・・・旅??大変おつかれさまデシタ。番組放送日楽しみにしてます」
「それはもう最高の出来になっていますから、期待して待っていてくださいねっ」
？なんせ、この!?ボクが!?出てるんですからっ！
？ババーンと効果音が付きそうな勢いで語る幸子は、最近では体を張った企画で、半ば自身の相棒と化しているりあむが、息荒くあきらの影から自身を見ていることに気付く。
「・・・・・・それはそうと、りあむさんは大丈夫なんですか??収録の時もそうですけが、ボクに会う度にそんな感じですけど」
「りあむは推しのアイドルに会うといつもこうなンで、気にしない方が良いデスよ」
「はあ、そうですか。いや、知ってましたけどね。ボクのカワイさは罪作りですからねぇ・・・・・・」
「おう何突っ立ってんだ邪魔だぞ幸子」
「ふぎゃー!?」

？しみじみ語る幸子の襟を摘み上げて、ぞんざいに放り投げたのはこの事務所のプロデューサー。
？猫のようにきゃーきゃー抗議する幸子をスルーして、プロデューサーは後ろに控えた少女を事務所に通すと、「外で仕事あるから、また後でな」そう言い残してまた出ていったのだった。
？さて、プロデューサーの導きで事務所に入ってきた少女は誰かというと、
「・・・・・はい。辻野(つじの)あかり、ただいまジャングル探検より無事帰還いたしましたーっ」
？可哀想なほど疲れきった風体のあかりは、夢見りあむ、砂塚あきらと同期のアイドルだ。
？彼女は、同期組三人の中で輿水幸子チャレンジ最後の挑戦者だった。
？というのも、他二人は割と早い段階でこの仕事をつなぐことが出来たのだが、あかりに関してはその正統派に可愛いらしい見た目から、通常のアイドル番組へ出演が早々に決まってしまい、幸子とのロケに使えるスケジュール調整が出来なかったのだ。
？しかし、順調に進んでいたあかりの正道が、無駄に本気を出したプロデューサーにより強引に捻じ曲げられたことで、今回の輿水幸子チャレンジ――「幸子と往く☆それ往け♡ジャングル横断～珍獣探しの旅～」へ駆り出されてしまったのだった。普通にかわいそうだと思う。
？なお、これが放送された際の評判は、水曜どうでし○うでやれ。あかりちゃんを解放しろ。両親を人質に取られてるに違いない。水曜どう○しょう。藤Dが足りない。うれしーも足りない。ミスターを呼べ。O泉も出せ。シカでした。幸子のサバイバル知識と技術が高過ぎて草だった。企画者はブンブンの刑に処す。涙目で幸子に縋るあかりんごが可愛かった。次はりあむにやらせろ。
？等々、いつも通り大好評（当社比）で幕を下ろす事になる。
「お疲れ様、あかり。いや本当にお疲れ様」
「がんばったんごぉ・・・・・・・」

「あかりちゃん、大変だったね・・・・・・」
「りあむちゃんとあきらちゃんにまた会えて良かったよおぉぉぉ」
?涙目で二人に抱きつくあかりの姿から、その企画の過酷さが伺えた。
?それを眺めながらウンウンと頷く幸子は、さながら成長した教え子を誇らしく思うレンジャー部隊の教官である。
「あかりさんは本当に良く頑張りました。どれだけ大変な目にあっても、挫けずに着いてきてくれたのをボクは誇りに思いますよ」
「幸子ちゃんが一緒に歩いてくれたから、私はここに戻ってこれたんです。ありがとうございましたぁ!」
「ふふーん、当然ですよ。ボクが共演する限り、絶対にここへ帰って来れるに決まってますよ。なんせ踏んできた場数が違いますからねぇ!」
?ライブの登場演出で高々度からのパラシュートを行ってから始まった体当たりロケを制覇し続けた彼女に、もはや怖いものなどないのだ。
「うぅ・・・・・・・二人ともこんな過酷なお仕事したんだね。凄いよぉ・・・・・・・」
「自分の?#輿水幸子チャレンジ?は二人と比べると全然だと思うけどね」
「いやあ、アイドル☆サバゲー?幸子&あきらＶＳ現役軍人１０人＋大和亜季(やまとあき)～壊滅させるまで帰れません～は地獄だと思うなあ、ぼくは」
「夜闇に紛れて、ゴム製ナイフで軍人さんを倒す幸子ちゃんはカッコよかったんご。映画見てるみたいだった!」
「今思うと、ＦＰＳの延長だから楽勝とか思ってた私は愚かの極みだよね」
「・・・・・・でも良いよね。二人は」
「?」
「あの後は普通のお仕事も増えて」
「あっ・・・・・・・」

「あぁ・・・・・・」
「ぼくのお仕事、なんか幸子ちゃんと顔合わせるのが増えてるんだよね」
「りあむさんの素のリアクションが好評でしたからねぇ」
「嬉しいんだけどね。推しのアイドルと一緒っていうのは嬉しいんだけどね。そろそろクソザコメンタルのぼくには厳しいかなーって。はは、ホントやむ」
？ほんのりと影を落とすりあむの横顔は、しかし何処か満更でもなさそうな色を含んでいた。
？何だかんだで憧れたアイドルの世界に飛び込めて、そして輝けて彼女は嬉しいのだ。更にはこの世界で動くと決めてからは、愛しのおにーちゃんと同じ住まいで暮らせるようにもなった。
？自己肯定感の低い彼女ではあるが、諦めずにアイドルの世界で歩き続けている自分のことは、ちょっぴり好きになれていた。
「まあ、それは置いといて」
「置いとかないでよあかりちゃん。ぞんざいに扱われるとか、ぼく、めっちゃやむんだけど」
「うん。置いといて？」
「ぼくを無視して進行しないであきらちゃん？」
「久しぶりに三人揃ったんだし、帰りに何かしたいなーって」
「あー、たしかに。こうして集まるの、かなり久しぶりだもんね」
「うわ、陽キャだ。陽キャの発想だ。こわー・・・・・・」
「って言っても、今からだと何が出来るかなー」
？時刻は午後１５時を過ぎたところだ。まだ学生の身分でありアイドルの三人には、外で遊べる時間はもう残り少ない。
？時計を見て唸り出す三人を見て、その交流の邪魔にならないよう幸子はこっそりとその場を離れた。具体的にはプロデューサーの事務机の下へ。ひえっ、幸子さん何用ですか、森久保いぢめですかウンヌン。久しぶりに会ったんですからボクたちも友達らしいことしましょうカンヌン。
「んー・・・・・・誰かの家に行こうにも私もあかりも寮住まいだから、

それなりに距離あるし・・・・・・」
「・・・・・・あれ。りあむちゃんってたしか、この近くに住んでましたよね」
「えっ」
「あ、そうだね。りあむの家が近いね」
「えっえっ」
「じゃあ、えっと、急なお願いでごめんなさいだけど、今日はりあむちゃんのお家にお泊まり会!?なんて――」
?瞬間、りあむは電光石火の速さをもって口火を切った。
「無理無理ダメダメ何言ってんのこの陽キャ共は陰キャにとっての自宅と自室がどんな意味を持っているのか分かってるのいや分からないよね陽キャに陰の者のパーソナルスペースの広さは分からないよねはーめっちゃやむ確かに二人はぼくの友達だけど急に家に来るとか言われても困るっていうかおにーちゃんが困るっていうかほら
　着替えの準備とかも出来てないしぼくの服貸そうにもほらぼくってちょっと胸大きいから二人にサイズ合わないかもだし何よりおにーちゃんを困らせたくないし」
「えーと、えとえと?」
「――りあむ」
「はい」
?説き伏せること烈火の如く紡ぎ出したりあむの言霊は、目をくるくるさせるあかりと、ジト目で呆れ顔のあきらが放つ一声によって食い止められた。
?そして、
「#本当の理由?は?」
「ぼくのお部屋が整備されてない牛舎の如く汚さだからだよう・・・・・・」
「牛舎」
「牛舎」
?幾つもの言葉を重ね、隠し通そうとした秘部を暴かれたのだった。
「・・・・・・じゃあ、今日のところはファミレスで」

「ん、おけー」
「うわあああ、恥ずかしい。めっっちゃやむぅ・・・・・・」
☆?☆?☆
?半月状にカットされたチーズの平面部分にバーナーを当て、熱せられた鉄皿でホクホクと湯気を立てるお芋と厚切りのベーコンの上へ、温められたチーズを削ぐようにかけていく。
?まだ熱の残る鉄皿へチーズが触れれば、食欲を刺激する香ばしい匂いがリビングに充満した。
「これがラクレット・・・・・・めっちゃ映える!?ちょ、おにーさんもう一回!?もう一回今のトローリをお願い!?動画、動画撮るから!」
「あきらちゃん、敬語忘れるほど興奮してる・・・・・・でも、そうなっちゃうのもわかる。とってもいい匂いと美味しそうな見た目だもん」
「そう言って貰えると、準備したこちら側としても嬉しいよ」
?エプロン（ぼくが初めてのお給料でプレゼントしたやつ!?おにーちゃんが好きな市松模様のホルターネック。似合いすぎて萌え（準死語）禿げる。というか禿げた）を着けたおにーちゃんが袖をまくって（二の腕!!）チーズを削ぎ落とす姿は最の高。
?おまけに、本当に嬉しそうに微笑むおにーちゃんは死ぬほど可愛いと思う。思うんだけどね。
「どうして結局ふたりがウチに来てるんだよう!?なにゆえ???ほわい!?」
「帰り道でおにーさんと偶然会えたから、そのまま招待されたんだよ。何言ってるのりあむ。記憶力大丈夫?」
「一緒に帰れる!?ってりあむちゃん鬼のように喜んでたよね。興奮しすぎて、お顔がりんごろうみたいに赤かったよ」
「顔がりんごろうは酷すぎてやむ・・・・・・っていうか普通は遠慮するよ。え、しない?」
「せっかくのお誘いだったし、ね。あきらちゃん」
「凄い凄い!?ラクレットすごくすごい!?#今日イチの一枚?な?#映えご飯?で最高すぎる!」
「砂塚さん、語彙力死んでるよ」

「あ、聞いてないねアレ」
「えぇー・・・・・・」
?陽キャはこれだから怖いのだ。陰の者が知らない間にあれよあれよと話を進めては巻き込んでいく。主に無関係なぼくを。今回は全く無関係じゃないけど。
?・・・・・・でもまあ。
「楽しいから、いっかー」
「ふふふ、そうだね」
「おにーさん、一緒に写ろう。ツーショットチェキしようよ」
「いや、俺はまだ料理途中だからそろそろキッチンに戻らないと・・・・・・」
「えー、この間私の寝顔どころか寝起き顔見たのに?」
「アレは消さずに寝たりあむと、何なら一緒に寝落ちした君の落ち度だろ。俺は悪くな――」
「事案」
「――は」
「成人男性が未成年女子の寝起きを覗き見る事案が発生」
「いや覗きて」
「なお、相手は現役アイドルのもよう」
「なんだその不穏な文字列は」
「#あきら速報」
「おーけー、分かった。撮ったらチャラで頼むよ」
「へへっ、おっけーデスよ」
「あきらちゃんとおにいさん、何だか仲良しだね」
「?」
「あれ、りあむちゃん?」
?なにあれ。
?なんか気付いたらラクレットを背景にあきらちゃんがぼくに無許可でおにーちゃんとチェキろうとしてるんだけどは??なにしてんの???ぼくでさえ滅多に出来ないのになにやってんの???
「ちょっと二人とも近い。近くない??いや近過ぎるでしょ!」

「だって二人で写るには近付かなきゃでしょ」
「やだ!?やあだぁー!?たとえあきらちゃんでもおにーちゃんに近過ぎるのはダメ!」
「いいなー・・・・・・そうだ!?私も混ざるんご♪」
「ブルータスお前もかあ!」
?陽キャの写真に対するこの意識の高さと反応速度ったら本当にない。やだ。むり。やむ。
?背の高いおにーちゃんを椅子に座らせて、それを挟むように二人が立っていた。スマホの撮影画面に収めるためとはいえ、やっぱり距離が近い。おにーちゃんも、その距離感をなんとも思ってなさそう。
?まあ、そりゃあそうか。ぼくがあきらちゃん達と一緒にアイドルデビューしてから何度もPサマと一緒にぼくを拉致迎えにお家(ココ)に来てるし、時間が遅くなった時はおにーちゃんが送迎してくれて、その度に会ってる。ウチに来たのも今回が初めてって訳じゃないし。
?・・・・・・でも、やっぱりぼく以外の女の子が、例えぼくが自信をもって友達と言える二人だったとしても、おにーちゃんが取られてしまったようで、胸の奥がジリジリと苦しくなる。
?そんな風に、嫉妬心で死にそうになっているというのに、だと言うのに、おにーちゃんはちょっぴり嬉しそうにしていた。
?そーだよね、こんな変な妹分より楽しくて明るくてイマドキな感じの普通の二人といる方が楽し――
「・・・・・・。りあむ」
?独りで不貞腐れていると、不意におにーちゃんが声をかけてくれた。
?シャッター音は、まだ聞こえない。
「おいで」
?・・・・・・・。
「りあむ一緒に撮ろ」
「りあむちゃん、早く早く!」
?・・・・・・・。
?・・・・・・・・・・・・・・・笑顔で僕を誘う三人が、なんか眩しい。

「やむ」
「ほら、早くおいで。りあむ」
「勝手に落ち込んでた自分のクソザコメンタルにやむぅー！」
「うわあ、走り込んでこないでよ」
「あっ、ちょ、りあむちゃん割り込み禁止っ」
「うるせー!?おにーちゃんの隣はぼくの指定席だっ。というか、この際だからあすなろ抱きを所望したりしなかったり!?」
?そんな風に、あきらちゃんとあかりちゃんとワチャワチャしていると、
「ほら早く撮るぞ。料理途中だって言ってるだろ」
「あっ、スマホ」
?呆れ半分の表情で、撮影モードになっているあきらちゃんのスマホを優しく奪って、
「りあむはココな」
「えっ、あっ、ひえっ」
?ぼくのここここ、腰におおお手手を回して、あろう事か開いた股の間に座らせる（!!）と
「はい、ちーず」
?ラクレットだけに。そんなお茶目なセリフと共にシャッターを押したのだった。
?はあああああああああああああああああああああああああああああ!!!!おにーちゃんがイケメン過ぎて辛いシンドい死ぬ死んだいや生きる!!生き返った。
?おにーちゃんと一緒のお墓に入るまで、死んでも死んでやらないっ!!
・*:　*・゜゜・☆*・。
?その後、楽しくお食事しているうちに寮の門限に間に合わなくなったので、お泊まり会へ移行した（寮への連絡は二人＋おにーちゃんがしてた）のだけど、寝床確保のためおにーちゃん協力の元、死ぬ気で自室を片付けようとするも、三人で寝る空間を確保出来ず、仕方なくリビングにオフトゥンを敷いた。そんな夜のこと。

？ぼくは、
「アハハハハッ!?この集合写真、りあむすっごい蕩けた顔してる！」
「り、りあむちゃん、ささささすがにこの顔はいかんよ――ぷふぅ」
？撮りたてのお写真で弄りにいじられていた。
「この瞬間の幸福指数が天元突破したっただけなんだよう!?やめろよォ！」
「おにいさんのこと、本当に大好きなんだねりあむちゃん」
「推しアイドルとおにーさんの事以外に詰まってなさそうだよね。そのピンクの頭の中」
「つ、詰まってるし。ちゃんと色々あるしぃ!?定期的にディスるのやめてよ。すっごいやむ！」
「例えば何が詰まってるの、りあむちゃん？」
「えっ。あー、うー・・・・・・？」
「はい、時間切れ」
「回答できなかったりあむちゃんの頭の中に、私たちの事も考えるスペースを作らせるんご！」
「既に出来てると思うけどね」
「えぇ・・・・・・」
？拝啓、お部屋に居るおにーちゃんへ。同期の弄りが容赦ないです。・・・・・・めっちゃやむ！

# れんあいりあむ

「なーんで!?なんでりあむだけお仕事なんだよう！」
?よう、よーう、よーぅ・・・・・・。りあむの発した声がこだまする爽やかな快晴の朝。昨晩、再開した友人と一夜を明かした彼女は、その翌日である今日にもアイドルとしての仕事があるのをすっかり忘れており、現在、遅刻寸前で迎えに来てくれたプロデューサーの車内にて、喧しい慟哭と怨嗟の声を響かせていた。
「うるせぇ！」
「Pサマがお仕事ねじ込んだせいでおにーちゃんと休日デートできないじゃん!!」
「捩じ込んでねぇよ、事務所のスケジュール表に書いてあったろうが。っていうかお前、売り出し中のアイドルが従兄とは言え男とデートとか、スキャンダルも恐れぬ愚行によしのんが助走付けてシャイニングウィザードするぞ」
「うぇ、なにそれ見たい！」
「よしのんがンなことやる訳ねぇだろうが、このクソメンタルおっぱいお化けが!?黙って仕事しろって言ってんだよ言葉の裏を読めアホ！」
「はあぁぁ??!言うに事欠いておっぱいお化けとかナニソレ!?オマケに言葉の裏とか、りあむちゃんにそんな駆け引き出来るわけないじゃん!?難しい事考えるの苦手なのっ!?シャドバで何連敗してると思ってんのさ!!」
?運転席と助手席にて、悪意を多分に含まれた全力投球で行われる言葉のキャッチボールは続く。
「所詮、りあむは胸がデカいだけの敗北アイドルじゃけぇ・・・・・・」
「敗北アイドル・・・・・・???喧嘩売ってんのかこの童貞！」
「どどどどどど童貞ちゃうわ!!?!」
「やーい、年齢イコール彼女なしマーン」
「マウント取ってるところ悪いけど、それお前もじゃね。あと俺、童貞じゃないからね。マジで。本当に。リアル」

「必死すぎて草草の草。ってかぼくにはおにーちゃんが居るし」
「なお恋愛フラグは立たん模様」
「それを言うなよ、やむだろ」
「急に真顔のガチ音声にならんでくださいますか。こわい」
「りあむちゃんのガチリンに触れたPサマが悪い。りあむ？いず？あんぐりー」
「逆鱗な。まあ、りあむは月輪のような、デカくて丸みを帯びたおっぱいしてるけど」
「うっわ、セクハラで通報しよーっと。えとえと、ひゃくとーばんひゃくとーばん」
「おいバカやめろごめんなさい申し訳ありませんでした」
「あはは・・・・・・りあむちゃん大荒れだね」
「荒れてるって言うか、逆に楽しそうって言うか。まあ面白いから良いんじゃない？」
？車内というリングでブチかまされる、益体も無いノーガードの殴り合いは、それを生暖かい目で見守る観客の声も混ざり合い、いよいよもって混沌としていく。
？ニュージェネレーションズ。りあむを連行するついでに、仕事場へ送られていく途中の、通称ニュージェネの三人娘は、それぞれがそれぞれらしく、眉尻を下げて困った様に笑んでいたり、祭りを楽しむギャラリーのようにウキウキとしていたり。
「ねー、しぶり、ん!?」
？と思えば顔を青くさせて、
「ふーーん。楽しそうじゃん、プロデューサー・・・・・・・！」
「ヒエッ」
？背後に蒼い憤怒の焔を揺らめかせるのを幻視させる勢いで、目の前の光景を嫉妬百パーセントで睨み続ける、同僚兼親友に恐れ慄いたりしていた。
「・・・・・・ん??なんか空気重くないPサマ」
「んん、そうかあ??まあ、気になるんなら取り敢えず少しだけ窓開けとくか。換気換気～」

「空気の重さは換気じゃどうにもならなくない??Pサマってひょっとしておバカ?」
「は??エグい量のアイドルを一人で育て上げる天才だが?」
「もしかして：しゃちく?」
「その言い方はやめろください」
?そんな惨状なんて梅雨知らず、後部座席で着々と育ち拡大していく蒼い煉獄をそのままに、戦々恐々とする本田未央、仲良さげな二人に少しだけ心がモヤッとする島村卯月、そろそろ漏れ出す嫉妬心で空間でも歪めそうな渋谷凛を乗せた車は、内部の有様とは裏腹にとても穏やかな走りで目的地へ向かっていくのだった。
「プロデューサーって、やっぱ胸が大きい方が好きなのかな。どう思う、意外とスケベボディな未央?」
「そ、そうなんですか!??わわわ私、その、えと。お、お胸にはあまり自信がないんですけど、どうしたらいいでしょう未央ちゃんっ」
「・・・・・・知るかっ!!」
★?★?★
【おにーちゃんとあきらちゃんのツーショット写真】
【は?】
【おにーちゃんが真剣な顔で食材を選んでる写真】
【は?】
【ポッキー咥えながら運転してるおにーちゃんの写真】
【セレクトショップ前でツーショットチェキ画像（マスクをずらして微笑むあきらちゃん）】
【甘ロリ系を着たあかりちゃん（めちゃかわ）とシックな黒の服で纏めたおにーちゃんの写真】
【そんなおにーちゃんに合わせた同じくシックなあきらちゃんとのツーショット】
【は?】
【は?】
【なにしてんの】
【ねえなにしての】

【ふふふ】
【したり顔のサメスタンプ】
【おにーさんとあかりとデート中】
【照れるサメのスタンプ】
【なに】
【ゆるさん】
【ごめん】
【おまえら】
【ちょっとふざけ過ぎたね】
【ぜったいにゆる】
【おにーさんの買い物に】
【無理言ってついて行っただけだよ】
【誤解させたらごめんね】
【デートではないから】
【ショップも私たちが無理やり連れてきたようなもんだし】
【ごめんね】
・?・?・
【あれ】
【りあむ?】
【本当にごめん】
【本気で怒ってるんだよね】
【今から謝りに行くから】
【許して欲しい】
【あきらちゃん】
【りあむ】
【たすけて】
【ごめんなさい】
【えっ】
【なにどうしたの】
【おにーさん呼んだ方がいい?】
【さっきので騒いだたら陽キャに絡まれた】

【笑うサメのスタンプ】
【何それ面白いじゃんｗｗｗ】
【面白くないよ！】
【こわいよ助けて!!さっきの許すから助けね！】
【フリックミスしてるの面白い】
【許してくれるの？】
【ひいいぃ、むりむり】
【ゆるするすゆから】
【わあああ顔が良すぎてむり顔上げらんないよおおおああお】
【めっちゃ笑う】
【たすけて!!!】
☆?☆?☆!

？拝啓、親愛なるおにーちゃんとついさっきまで憎き怨敵だった砂塚あきらちゃんへ。

「このあきらちゃんマジ可愛いね！」

「いやいやー、こっちのあかりちゃんもイイっしょー！」

「てか、りあむちゃんのお兄ちゃんもヤバくない？」

「わかる」

？りあむを助けてください。ここは天国と地獄が一体となったメドローア空間です。

？お仕事（今日は雑誌インタビューだった）を終わらせて、事務所でだるだるしている所に飛び込む衝撃のメッセージテロ（おにーちゃんとあきらちゃんあかりちゃんのデート！）にほぎゃーほぎゃーと騒いでいたら、すわ何事かと駆け付けたのが彼女たち。

？城ケ崎美嘉（じょうがさきみか）ちゃんに、大槻唯（おおつきゆい）ちゃんが徒党を組んでぼくを挟んできた。美人と美人に挟み込まれたら、これもうりあむも美人になれるんじゃないの。こう、リバーシ的な感じで。え、むり??なにそれやむ。

「おっ、新しいメッセ来てるよー」

「んん、今度はキャスケットにスキニーとチェスター合わせてきた。イイネイイネ!?カッコイイコーデだねぇ」

「あきらちゃんはこういうハンサムコーデが似合うよね」

「ね!?あ、今度はあかりちゃんが・・・・・・あはっ、着ぐるみパジャマじゃん！」
「ふふっ、サメの着ぐるみなんて売ってるんだ。照れ顔ダブルピース可愛いっ」
「あかりちゃん、完全におもちゃにされてんねー」
？あの、えと、うんと。ぼくのスマホを両サイドから覗くのやめて欲しいって言うか、なんかめちゃくちゃ良い匂いがするっていうか、良いというかエロい匂いっていうか、お二人共たしかレッスン後みたいな事言ってたような気がするんだけど、なんで汗の匂いしないのっていうか、ていうか。・・・・・・っていうか!!
「二人は!?どうして!!?おにーちゃんとデート続行してんのさあ!!」
「うえへぇ!?」
「あははっ!?美嘉ちゃん変なひめいー」
「唯っ」
「怒んな怒んなー??ほらほら、ゆいと一緒にスマーイル！」
「むみゅ、ほっぺぐにぐにするな！」
？何をへーぜんとぼくにファッションショーの写真を送り続けてやがるんだっ。ツイッターかデレぽに流せよ！
「でも間に挟むおにーちゃんの写真はありがとうございますっ」
？今日も今日とておにーちゃんは素敵に無敵で最高なのだ。何を着ててもかっこいい。ぼくの自慢のおにーちゃん！
「んふふー、りあむちゃん面白いねー」
「あ、ひぇ、なんっ、なんでそよ!?」
「こら唯ー??イキナリ話しかけたからりあむちゃんがビックリしてるじゃん」
「えー、最初に声掛けたの美嘉ちゃんじゃーん。ゆい悪くないしー？」
「イヤイヤ、今ビックリさせたのは明らかに唯でしょ」
「じゃあ、間をとってキャーキャーしてキョーミをそそったりあむちゃんのせい、ってことで！」
「うええ!?ぼくが悪いの!?」
「そーだよー。にへへ」

「えぇ・・・・・、騒いだのは悪かったけど、仕方なかったんだよう。一大事だったんだよう。やむ・・・・・・」
「あれ、マジで落ち込んじゃってる？」
「ちょちょ、唯、早く謝んな！」
「あはっ、ゴメンネりあむちゃん!?お詫びに飴ちゃんあげるー」
？はいアーン、なんて現役アイドル（ぼくもだけど！）からロリポップを差し出されたら、そんなの食いつかずにはいられない。
？本当なら口に入れないで持ち帰りたいところ（気持ち悪い??ほっとけ！）だけど、キラキラお目々の唯ちゃんと、反対側から「唯なりの誠意だから貰ってあげて」なんてお声が聞こえてしまったら、口にしないと言う選択肢は消滅するのだ。
「もご。あひがひょうごじゃいまふ」
「あはははは!?何言ってるかわっかんねー！」
「ふふっ、それはアタシも流石に笑うわ」
「むむぅ。ひゃむ」
「やむ？」
「んふふ、ゆいも今のは分かった」
？カラコロと音を立てて転がる棒付きの飴が、ぼくの舌の上で甘いイチゴ味を香らせながら、ゆっくりと溶けていく。
？可愛くて綺麗な人が笑うと、ただでさえ良い顔なのに、それに二乗三乗と良さみが加わるから卑怯だ。
？はたして、ぼくはおにーちゃんの前でこんな風に可愛く綺麗に笑えてるんだろうか。ぼくなんかが。まだまだ凄いアイドルになれてないぼくが、あきらちゃんみたいにオシャレでもないし、あかりちゃんみたいに明るくて可愛い訳でもないぼくが。
「・・・・・・どうなんだろ」
「んー、りあむちゃん、ひょっとして何かお悩みちゅー??おっきな声の原因はそれかな？」
「そうなの、りあむちゃん」
「ん、と。へへ、どうだろー」
？びっくりした。コミュ強の人は読心術が使える説を提唱したいと

思う。
？カラコロ。少しだけ心配そうに、ぼくの顔を覗き込む唯ちゃんの口の中で解ける甘い香りが、ぼくの鼻を掠めた。桃のフレーバーだ。
「んー？」
「えと、なんでしょう!?ぼくの顔には目と鼻と口しか付いてないよっ」
「あはは!?じゃあゆいとオソロだね!?いえーいペアルックー☆」
「いや、それ人間ならみんなそうだから。なんなら大体の生き物がそうだから」
「じゃあ、皆みーんなゆいたちとオソロじゃん!?生き物みなきょーだいだね！」
「こらこら、テンションだけで喋るなー？」
「いえーい!?これでゆいとりあむちゃんは友達だ！」
「えっ、そうなの!?」
「ついでに美嘉ちゃんとも友達だよー、へっへーん」
「アタシはついでかーい」
「いえーい、お友達記念にハイタッチしよー！」
「えぇー、完全に陽キャのノリだよう・・・・・・・」
？ウェーイ系のノリはなれないよう。・・・・・・だけど、楽しそうにはしゃぐ唯ちゃんにハイタッチを求められ、思わずぼくもぱちりと手を合わせた。
「えへへー、ぎゅー」
「はえ!?」
？そうして、ほんの一瞬だけ触れ合った手は離れていくとばかり思っていたぼくの手は、唯ちゃんの手に絡め取られてしまったのだった。なんで!?
？柔らかくて温かいお手々の感触に、沸騰しそうなぼくの軽い脳みそを何とか押さえ込みながら、くにくにとぼくの手を確かめるように握る手から視線を前へ向けると、唯ちゃんの綺麗で澄んだ青いお目々と衝突してしまった。ひえっ、かわいい。
「ナン、何コレ!?」
「恋でしょー」

「ふえっ」
「恋のお悩みなんでしょー？」
「なんっ、はえ？」
？なぜバレたし！
「うふふー、だって恋する誰かを想って、ちょっぴり暗くなっちゃったり、自分に自信がなくなっちゃう感じの顔、ゆいはメッチャ見てるからねー」
「うわあ、流石はパリピ系女子。恋愛面はつよつよだあ」
「ふっふっふ。そうなのです、ゆいは顔を見るだけで恋をしてるか察知できる、恋愛マスターなのですっ」
「唯ってそんなに経験豊富だっけ？」
「んーん。そんなに経験値は高くないよー??美嘉ちゃんと同じで」
「ちょっ」
「え、じゃあ何でぼくのこと」
？分かったの。そう言おうと口を動かすと、目の前で唯ちゃんはにんまりと意地の悪い笑顔を浮かべた。
？あ、ぼくこの顔知ってる。おにーちゃんとあきらちゃん、それとPサマがぼくに意地悪する時の顔に似てるから。
「唯、アンタまさか適当言ってからかってるんじゃ――」
「だって毎日のようにプロデューサーちゃんのことを乙女顔で見てる美嘉ちゃんを、事務所で見られるからね！」
「な〝っ!?」
？わー、美嘉ちゃん顔真っ赤。耳まで赤いよ、可愛いよ。でもすんごい目が泳いでるのはちょっと面白いよ。プーさんのホームランダービーに出てくる変化球並みに視線が泳いでる。
「なん、ななななっな、なんノことカナ!??何言ってんのかなこの子は!!」
「あははっ、美嘉ちゃん動揺しすぎー!?てかそのリアクション今更感やばーい」
「誰があんな冴えなくてデリカシーなくて空気読めなくて自分のことはだらしない癖に他人の事は良く見てていざとなると頼りになって

自分の苦労も顧みずに動いてくれて失敗も成功も苦しい時も楽しい時も分かちあってくれる素敵な人のことなんてなんともっ!?なんっっっっっっ～～～っとも!!?想ってないんだから!!」
「いやもう、メッチャ好きじゃん」
「好きじゃない！」
「じゃあ嫌い？」
「きらっ・・・・・・い、という訳でもないっ」
「あ、そう言えばこの前グラビアで海に行ったじゃん??あの時二人っきりのすっごいロマンチックなシチュになってたって聞いたんだけど、どーなったの？」
「はっ!??誰が言ってたのよそんな事！」
「んーとね、休日のサーフィン満喫してた麻理菜さん」
「ああ、そう言えば居たわ麻里菜さん・・・・・・。あの時ガッツリ見られてるとは思わなかったけど・・・・・・」
「ねーねー、それでどうなったの??告った??それとも一線超えちゃった？」
「こっ、え、いい、いっせん!?」
？女の子は三人集まると姦しいらしい。けれど陽キャギャルは二人だけでも十分に姦しい。
？目の前で繰り広げられているコレがきっと「恋バナ」と言うやつなのだろう。圧倒的なリア充の匂いを感じる。具体的には恋にアイドル活動に日常生活が楽しくて仕方ないという光属性の波動を。
？というか、
「・・・・・・これぼくが聞いていいい話なのかな」
？人気アイドルがプロデューサーに恋をしてるだなんて、スキャンダルもいいところだ。基本的に口と頭が軽いぼくがこんな重荷を背負いきれるとは思えない。ふとした拍子に喋るか書き込むかして、灰も残らないほど炎上するのが目に浮かぶようだ。勘弁してください、ぼくまだアイドルしたいです。
「――それで、沈む夕日が見える綺麗な海岸でね。アタシがアイドルやれてるのも、心の底から楽しめてるのも、全部アンタのおかげで。

楽しい時も苦しい時もそばに居てくれて、支えてくれるアンタのことがーって言ったわけよ」
「ええっ、言っちゃったの!?」
?でもまあ、それはそれとして美嘉ちゃんの恋の行方は気になるりあむちゃんなのです。
「いやまあ、その場の雰囲気に押されてね。りあむちゃんも気を付けなよ～「なんかイケそう」って空気ヤバいから。マジでそれしか頭になくなっちゃうから」
「はえー」
「おおー!?すげーじゃん、告っちゃったじゃん!?で、で??Pちゃんのお返事は?」
「そしたらアイツいびきかいて寝てんの」
「なんじゃそらー!」
「いやもうマジでないって思ったよね」
「ないわー。ホントにないよ。流石にドン引きだよPちゃん」
「Pサマひっどいなあ・・・・・・」
「でも、仕事先で寝ちゃうほど疲れてるの知ってるし、その一因はアタシにもあるって分かってるからさあ」
「あー、ね」
「うっ、その言葉はタイムリーにぼくを責めてくるぅ」
「だから、なんかもう、逆に嬉しくなっちゃって」
「んー、んん??何それどゆこと?」
「ぼくもちょっと何言ってるかわかんない」
「えー、あー・・・・・・」
?なんて言ったらいいのかなあ。なんて、頬を赤らめながら口ごもる美嘉ちゃんの表情は、今までテレビの向こうや、ライブ会場で見たどの顔よりも輝いていて、思わず見とれてしまう。
?これが、
「だってさ、アタシの隣で――隣にいる時に安心しきった顔で爆睡してるんだよ??そんなの、なんかもう信頼されてるんだなーって、嬉しくなるに決まってるじゃん」

?これが、本気で誰かに恋をしている。キラキラ輝く女の子の顔なんだ。
?アイドルの、ぼくが憧れる凄くて尊くて綺麗な人たちの、最高に推せる瞬間なんだ。悩んだり、苦しんだりした先で芽生える、雲の切れ間から見えた空の光みたいな、そんな夢みたいに綺麗な姿を、この後も唯ちゃんに弄られながら嬉しそうに、大切な宝物を見せるように、だけど時に苦しそうに、けれどやっぱり最後には美しい笑顔で恋を語る美嘉ちゃんを、ぼくは夢中になって目に焼き付けたのだった。
・*:・*・.・.☆*・。
「それで、美嘉サンと唯サンと友達になれた。と」
『えへへー、そうなの。ぼくに友達が増えたんだー♪?コミュ強の人って凄いよね。なんか気が付いたら普通に会話してたもん、ぼく』
「#カリスマギャル?だもんね。そこら辺は本当に凄いと思うよ。私も会ったことあるけど、気付いたら普通に話してたし」
『ねー!?いやあ、りあむちゃんだったら話しかける切っ掛けすら取り逃して、沈黙地獄の門が開かれてしまう所だよ』
「ああ、簡単に想像できるね」
『そこ同意されるのはやむ・・・・・・』
?そんな言葉とは裏腹に、嬉しさを前面に押し出した表情で語るのは、小さな液晶を挟んで相対する友人の姿。
?ルンルンふわふわ。左右に揺れる桃色の髪から覗く水色のインナーカラーが、彼女が如何にご機嫌であるかを言葉にせずともこちらへ伝えてくれた。
?その証拠に、落ち込む素振りなんて一切見せずに、りあむは鼻息荒く言葉を紡ぐ。
『いやもう、ホントに凄いよ!?恋するアイドルの尊さは控えめに言って死ぬほどヤバいよ!?鳴かぬなら?鳴かせてみせよう?尊さで?尊み秀吉。って感じ!』
「うん。意味わかんない」
『わかって?』
「自分の意見を押し付ける厄介オタクかな?」

『ちがっ、ちが・・・・・・違うし!』
?ちょっと怯んで言い淀むのが面白い。・・・・・・まあ、意味はわからないけど、言わんとしている事は理解出来る。要するに、恋する女の子は輝いて見える。そういうことだろう。
?だったら、今すぐ鏡なりよく磨いた金属なり自撮り写真なりを見ればいいのに。今日の戦果――おにーさんと巡ったショップで手に入れた秋用の服を、綺麗に畳みながら、私はそう思案する。
『はあ、ぼくもあんな風にキラキラしたいなあ。そうすれば、おにーちゃんもきっと、りあむちゃんルートのフラグ立ってそのまま個別エンドで、ぼく大勝利なのに』
「そんな上手くいくかなあ」
『いくの!?おにーちゃんの傍に一番長く居る女の子はぼくなんだし、一緒に暮らしてるし、心のどこかでは意識してるはずっ!?・・・・・・じゃないと、やむ』
「#今日のやみ?頂きました」
『ぼくは真剣に悩んでいるのに、親友の反応が軽すぎてやみやみだよ・・・・・・』
「あと、おにーさんのお仕事的に、付き合いの長い女の人は他にも居ると思う」
『追い討ちかけないでよォ!?うわー、それ考えないようにしてたのに、やだ!?むり!?やむ!?うう、どうしよ、知らない泥棒猫におにーちゃんが盗られちゃったら』
?ほら、その顔だよりあむ。おにーさんの話してる時、りあむはいつも以上に表情が変化する。
?楽しそうに笑ったと思ったら、急に何事か考えて落ち込んで、かと思えば幸せそうに微笑んでみたり・・・・・・恋する女の子の魅力が云々だなんて、そんなのもうとっくの昔に私は知っているのだ。
?時折、このどうしようも無く自己肯定意識の低い友人が見せる、流れ星のように輝くその表情に、私が小さな憧れと少しの嫉妬心を燻らせているのを、きっと彼女は知らないだろう。
?そんなことを考えていたら、柔らかいネイビーカラーのキャスケッ

トが目に入った。今日のデー・・・・・・買い物でおにーさんとあかりに良く似合うと褒めて貰えた物だ。思わず衝動買いしてしまったけど、こういうワンポイントになるアイテムが不足気味だったから、むしろ良い買い物だったと言える。
？手に取って眺めていたら、それを見たりあむが声を上げた。
『あー、それ！』
「あ、やば」
『おい、あきらちゃんよう。ぼくは昼間のアレ、忘れたわけじゃないんだぞ??何勝手にぼくのおにーちゃんとデートしてるんだよう』
「りあむのじゃないし、許してくれたじゃん」
『あの時は良さみが深いお顔に挟まれて混乱してたからノーカンだよ!?あと「まだ」を文頭に付けて。まだりあむのじゃない、が正しい言い方だよ！』
「えー」
『えーじゃないよ!?っていうか、それを言うならあかりちゃんも同罪だったよ!?あきらちゃんのメッセが衝撃的すぎて忘れてたけど、あかりちゃんこそぼくに黙っておにーちゃんとデートしてるじゃん!?なんて強かなんだあかりちゃんっ。でもそんなギャップもしゅき・・・・・・』
「あかり、ずっとりあむのこと気にしてたから怒らないであげて。私たちだけで遊んで申し訳ないって」
『うん、分かってるよう。というか、予定が合わなかった友達の、休みの過ごし方に口を出し始めたらいよいよもって面倒臭い厄介なヤツになっちゃう・・・・・・』
「ふふ、そこは自制するんだ？」
『当たり前だよ。そんなことして友達とギスギスするの嫌だし、何よりデートなんてぼくは幾らでも出来るからね！』
？なんなら毎日がお家デートだし!?なんて胸を張るりあむが少しだけ羨ましい。メンタル弱いとかクソザコとか自称してるけど、実際のところはかなり打たれ強いよね、りあむ。
？曲がりはするけど折れないって感じ。

『んんぅ、話してたらあかりちゃんの声聞きたくなってきた』
「#面倒臭い系の彼氏・彼女?かな」
『違うよ??よーし、りあむちゃん、あかりちゃんにも電話繋いじゃうぞー』
「いやもう良い時間だし・・・・・・うわ、気付いたら十一時だ」
『そんなのまだスタートラインだよ』
「いやそりゃあ、夜更かしになれてたら普通の時間帯だけど、あかりはもう寝てるんじゃないかなあ」
『女は愛嬌、なんでも笑って誤魔化せば良いもんさ。ということでグループ通話ポチー』
「あっ、またそうやって脊椎反射で動く」
『後のことは考えず、がむしゃらに進め、りあむ。Pサマが言ってた事を実践した迄だよ、ふふん』
?一切の迷いがないドヤ顔が眩しい。これはきっと責任をPサンの言葉に全部乗っけているからこそできる顔だ。きっとりあむの心臓には剛毛が生えている。
?・・・・・・でもまあ、
「こんな騒がしい子が傍に居たら、おにーさんも気にしないワケないでしょ」
?プリントアウトして部屋に飾ってあるお泊まりの時と、ショッピングの時の写真を一瞥して、りあむに聞こえないよう呟くと、寝ぼけ眼を擦りながら画面に映り込んできたあかりと、そんなこっちの声をちゃんと飲み込めているのか分からない彼女の可愛さに限界化したりあむを咎めるために、私は知らず知らずのうちに笑みを浮かべながら二人の中に飛び込むのだった。